

巻頭言

緑の國づくり

林 文子

今年も4月24日から「みどりの週間」がはじまり25日には両陛下の沖縄県イマンスコメスでの全国植樹祭が行われた。

那覇市における沖縄復帰20周年行事とあわせて、毎年、都道府県をめぐる植樹祭の全国一周目の最後に、ようやく沖縄にまわったことになる。

歳月は戦後40年を数える。町並みの復興はそれなりに進み活気づいているが、沖縄県民の殆どが直接戦場となった故郷の悲惨な思いを癒やすことができないまま今日に至っていると聞く。沖縄の植樹祭は、とりわけ平和への熱い願いをこめた、戦争で失われた緑を取り戻すことと重ねあわせた特記すべき記念行事になった。

長い年月をかけた各自治体毎の緑化推進事業にもようやく特色ある成果がみられるようになってきた。山林の保全、国土の保全とか自然生態系の保全ばかりでなく、緑空間の維持は景観の維持、レクリエーション、保養地の確保など、生活環境の改善向上にも整合できるような努力に発展してきた。

たとえば名古屋市の場合、戦後長い間、緑の少ない街とか特色の無い街といわれてきたが、いろいろと街の緑化に努めている最近の名古屋市は、緑被率（密林地、草地、農地、水面で覆われた土地の面積の、市域の全体に対する割合）を西暦2000年には30%を確保することを目標にしている。平成2年度の調査で29.8%に達したと報じている。これまで街路樹の整備や公園緑化事業を積極的に推進してきた結果である。市営の種苗工場を開設して、苗木や草花を育てている。市民一人一人の意識の改革が大切なことは言うにおよばず、長く変わらない事業として推進する行政の力は大きい。

すくすく育った緑の木陰に憩い、草花をめぐる空間を与えられた自然の恩恵に感謝している。

（健康文化振興財団理事長）